

私の音響デザインの考えは 「画の外」に音を付けること —— 小野 さおり



インタビュー・文 吉井 勇

NHK のドキュメンタリー番組における音響効果の第一人者として、優れたサウンドデザイン能力を発揮してきた小野さおりさんに、個人・グループ部門 放送文化の賞が贈られた。放送文化の審査委員・吉井勇さんが小野さんに話を聞いた。

NHK 初の女性音響デザイナー

小野さおりさんは 1987 年に NHK へ入局している。当時、まだ男性天国だった NHK で、初の女性音響デザイナーとして採用されたのである。

「現在、NHK 放送センターの音響デザイン部はドキュメンタリー部門、ドラマ部門それぞれ 20 名程度という陣容で、今日ではおよそ 3 分の 1 が女性です」と、女性の進出が著しいと話す。

NHK のドキュメンタリー番組は高い評価を集め、視聴者の信頼も厚い。小野さんは、この NHK ドキュメンタリー番組の音響デザインを担当。その活躍は放送文化基金賞においても、今年の第 37 回でテレビドキュメンタリー番組部門の本賞を受賞した NHK 広島放送局制作の『封印された原爆報告書』や、昨年同部門で番組賞となった『日本海軍 400 時間の証言』と『証言ドキュメント 永田町・権力の興亡』の 2 作品をはじめ、『クロウズアップ現代』などにも取り組み、作品に音響の命を与え続けている。

ドキュメンタリー番組の音響デザインは地味で目立たない。しかし、音の役割を軽んじる制作者はもちろん、視聴者もない。心に深く刻まれる音響デザインの実績を重ねてきた小野さんに個人・グループ部門「放送文化」が授与されたのである。

作品との出会いは「偶然」

手がける作品とどう出会うのか。実績ある小野さんともなると、作品を選ぶことができるのだろうか。

「NHK のドキュメンタリー番組は年間と月間の計画が

ありますので、誰がどの作品を担当するか、制作からの要望も含めて全体で決めていきます」と教えてくれた。作品との出会いは、意外にも「偶然」なのである。

小野さんは担当する作品が決まると、A4 一枚に書かれた番組提案票を何度も読むことから始める。「提案票を読むことで、自分なりの考えを広げていくのです。こういった語り口がいいかなとか、さまざまな考えを膨らませていくのです」。

こうした小野さんの「文字派」とでもいうべき手法は、最近の若手たちのやり方とは少し違うようだ。小野さんたちは VTR 試写のあと、最初のうちはそのコピーをもらうことがなく、1 回の試写で見た映像の印象と番組提案票に書かれた内容からイメージを膨らませる訓練を重ねてきた。ところが今日では、デジタル技術の進化により PC に VTR データを入力して何度も映像を見られるようになった。便利になった反面、「画に音を貼り付ける」デザインになっていないかと指摘する。「音が限定的になり、作品のメッセージ性を伝えることが狭くなっているのではないか」と気にかける。

「画の外に音を付ける」という考え

小野さんは「画の外」という言葉をインタビューで何度か使った。この考えは、阪神・淡路大震災の番組経験から抱くようになったと振り返る。当時、大阪放送局で音響効果を担当したが、震災後の瓦礫となった神戸の街に立ったとき、被災した街を伝える映像に音を付ける怖さを感じたという。「一方的に、同情を押し付ける音響効果や選曲になったり、ときには被災者の心を傷つけてしまう



小野 さおり さん（おの・さおり）

NHK デザインセンター音響デザイン部チーフ・ディレクター

桐朋学園大学音楽学部卒業後、1987年 NHK 初の女性音響デザイナーとして入局。NHK スペシャルやクローズアップ現代など、ヒューマンドキュメンタリーから政治・社会・経済まで幅広くドキュメンタリー番組を担当。2000年日本映画テレビ技術協会「柴田賞」、2006年「放送人グランプリ特別賞」を受賞。

音もあるのではないかと。神戸の鷹取商店街の焼け落ちた跡地に立ったとき、私に迫ってきた問いでした」と語る。

小野さんが音響デザインの作業で大事にしているのが、1週間前に行われる番組試写だ。台本を手に、初めて映像を見る機会、ナレーションをディレクターが読む。見終わってどう感じたか、ディレクターの思いと作品の構成などを検討する場である。

小野さんはおもしろいことを言った。「私は最初から通して客観的に見る視聴者であるとともに、制作に係わっているという半々の立場なのです」と言い、「この場に参加しているとき、私は視聴者と音響効果担当の間を行ったり来たりしながら、落としたカットへのディレクターの思いなども聞きながら、どう音で伝えていけばよいかと思いを巡らせているのです」。このあたりに小野さんの言う「画の外に音を付ける」秘訣が潜んでいるようだ。

現場音と現実音

小野さんは音大のピアノ科出身。学生時代は毎日7時間も8時間もピアノに向かっていたそうだが、NHKに入局してからは深夜に帰宅する小野家の「フーテンのさおり」になっていたと笑う。午前様で帰宅したら玄関先で父親が待ちかまえており、「出ていけ!」と怒鳴られたこともあったそうだ。小野さんは、「スタジオの中の話し合いも大事ですが、スタジオを離れ、考えを自由に交わす制作の議論がおもしろくて」、気がつけば酒も嗜む女性音響デザイナーになってしまっていたそうだ。そして今回、深夜帰宅を心配したご両親も贈呈式に参加され、娘の受賞を喜ばれた。



吉井 勇 さん（よしい・いさむ）

株式会社ニューメディア「月刊 NEW MEDIA」編集長

宮城教育大学卒業後、都立養護学校に勤務。その後私立幼稚園教諭を経て、教育関係の出版社に勤務。1983年月刊 NEW MEDIA の創刊から係わり 1988～1989年に編集長。その後、1993年まで地域情報研究所・主幹研究員を兼務。2001年4月から2度目の編集長となる。日本画質学会事務局長。

若手と一緒に考えたいことを聞いた。「ドキュメンタリー番組で音の役割は、視聴者の深層心理に問いかけるものです。音楽を選曲するだけでなく、マイクが集めた現場音を大切に、それをもとに現実音を構成するために自らの能力とセンスをどう発揮していくかということです」。

デジタル時代の音響デザイン

アナログからデジタルという技術進化は一つの領域だけで完結するのではなく、関連する分野を巻き込み、互いに共鳴するかのように新しいデジタル総和化をもたらす。今回、小野さんが担当する音響デザインは、最も激しいデジタル技術の洗礼を受けた分野の一つだろう。いや、いち早く受けたといってもよい。

マイクで集音してきたサウンドは、デジタルによる清音でノイズをきれいさっぱりと消し去ることができ、ノイズの後ろに隠れていた音がクリアになる優れた面がある。一方、ファイルデータの編集作業は突き詰めると際限がなく、長時間の作業を強いる。また、放送を受信するテレビも様相が一変した。ブラウン管ではボックス状の構造で共鳴させていたが、薄型テレビでは共鳴する空間がなく、板状となってしまった。新しいデジタルテレビにどういった音響デザインが相応しいのか。感性の仕事であると同時に、制作技術の検証も求められる。

豊かな音の世界を再現する上で、デジタル技術は一見簡単な表情を見せるが、実は一筋縄ではいかない荒馬だろう。そんな難行に挑む音響デザイナーたちの仕事に、審査メンバーは敬意を持ち、ぜひ賞をと考えていた。小野さんの受賞を心から喜ぶたい。